保育実践現場におけるICTを活用した子育て・子育ち支援
― 保育園におけるデジタル・ストーリーテリング活動 ―

The Use of ICT for Early Childhood Education and Parenting Support：
Digital Storytelling in Nursery School

所属・職名　東京女子体育大学・短期大学 准教授
氏名　　二 宮　祐 子

［成果の概要］

● 研究目的とその背景

『平成30年版 経済財政白書 Sosiety5.0の経済へ』(内閣府 2018)にも示されているとおり、近年、日常生活のあらゆる場面において、ICTやIoTが浸透しつつあり、保育実践現場にも、その波が押し寄せてきた。国や地方自治体も、様々な制度の整え、児童票や連絡帳の作成などの園内業務を中心にICT化を推進している。その一方で、保育現場ではICTの導入にむけて戸惑いの声も根強くあり、特に、子どもに対する保育や保護者支援におけるICT機器の活用については慎重な姿勢がみられる（保育の友編集部 2018, 高橋他 2017)。

本研究では、先進事例の一つとして、「9割のアナログ保育と1割のデジタル保育」を掲げて、ICTの活用に積極的に取り組んできた「認定こども園 つるみね保育園」におけるクラス活動「プレゼンタイム」に着目した（渡邉他 2017)。プレゼンタイムとは、保護者から届いたデジタル画像をもとに、子どもがエピソードを語り、聴き手となった子ども達とのやりとりを楽しむ活動である（写真1）。

写真．プレゼンタイムの様子（2018. 9. 10. 撮影）

活動そのものが、子ども達にとって楽しいものであることは、子ども達の様子はもとより、保護者からの反響などからも、すでに確かめられているが、保育・幼児教育や子育て支援の観点からはどのように捉えられるのであろうか。

第一に、幼児教育の観点からは、物語り行為(narrative / story-telling) という言語的なリテラシー育成として位置づけられる。北米では、幼稚園(kindergarten) や小学校低学年において「sharing time」「show and tell」などと呼ばれるクラス活動がさかんに行われてきた(ex. Cazden 2000, Michaels 1981)。具体的な活動内容としては、子ども達一人一人が、クラス全員の前で、放課後の出来事から、何か話したい内容を選んで、クラス全員の前で語り、クラスメイトたちはこれを聴く、というものである。教室内の出来事で

はないため、その場に居合わせなかった教師や他の子ども達にとっては未知の出来事を題材として、話し言葉のみを頼りに活動が進行することになる。この活動を通じて、言語能力やコミュニケーション能力の向上が目指されるわけである。我が国の就学前教育でいえば、領域「言葉」に相当し、初等教育における「言語活動」（文部科学省 2011）の芽生えとして位置づけられるであろう。

ただし、幼い子どもの場合、語彙そのものが少なく、物語り能力も未熟であるために、このような活動を成立させるには教師の専門的技術を駆使した援助が求められる。とりわけ、エスニシティーや母語が異なる子どもの場合は、一層、手厚く行う必要があることが、かねてより指摘されてきた(Michaels 1981)。このため「sharing time」等では、教師の専門的知識・技術が埋め込まれた「質問」で介入することにより、子どもの語りへの統制が行われていることが報告されている(Cazden 2000)。

一方、つるみね保育園の「プレゼンタイム」の場合、保育者からの言語的な介入は最小限にとどめ、代替手段として、デジタルなサポートを取り入れている。この手法が、どのような効果をもたらすのか、検討する必要があると思われる。

第二に、子育て支援上の観点から述べる。これまで、保育者―保護者間のやりとりは、会話や面談か、あるいは、連絡帳やおたよりなどの、アナログ媒体を用いるものが主流であった（cf. 二宮 2018）。これらは、保護者側の日本語の習熟度に依存するところが多く、特に、日本語を母語としない保護者にとって負担の大きいものであることが指摘されている(富谷他 2011)。画像をもちいたネット上のやりとりであれば、このような障壁を乗り越えていく足場となる可能性もある。保育支援システムの導入には躊躇する園が多いなかで（高橋他 2017）、ICT を活用した範例の一つとなりうる。

以上より、本研究では、ICT を活用した先進的な保育実践事例として「プレゼンタイム」に着目し、そのプロセスを分析することにより、デジタルを活用したストーリーテリングの機能や効果について検討することを目的とする。

● 研究の対象と方法

対象：社会福祉法人 上名福祉会　つるみね保育園。定員 60 名（0～5 歳児クラスが 1 クラスずつ）。園長 杉本正和先生。同園の HP や SNS などをもとに情報収集したのち、9 月 10～11 日に同園を訪問し、プレゼンタイムを中心とする保育実践への参与観察および園長へのインタビュー調査を実施した。

方法：ICT を活用した実践について、ナラティヴ・アプローチの一種である「デジタルストーリーテリング」（小川 2016，西岡 2014）の観点から検討を行った。

● 結果

プレゼンタイムの流れは、①家庭における準備と、②クラスにおける活動の 2 つの段階に分けられる。このプロセスについて、デジタルストーリーテリングの観点からとらえれば、①保護者が子どもと共にストーリーの題材となる画像を用意する段階、②子どもが画像を

もとに、クラスメイトの前で家でのエピソードを語ったり、討議したりする段階、となる。活動内容を順に示していく。

① 家庭における活動

あらかじめ、家庭から、保護者が撮影したデジタルカメラの画像や動画が園に送られてくる。もともとは、連絡帳でのやりとりの延長上で、保護者からデジタルな情報として送られてきて、担任保育者だけが閲覧していたものであった。園で「プレゼンタイム」の教材として、クラス活動にも活用されるようになったことにより、保護者から以下のようなコメントが寄せられている。

・クラス活動を意識しながら、親子で一緒にエピソードを語り合う機会が増えた

・家族の前で、子どもが語りの練習をする姿が見られるようになった。

・プレゼンに用いる写真を選ぶために、親子で写真を通して振り返る機会が持てた。

② クラスにおける活動

園では、プロジェクタで画像や動画を上映し、その横で語り手となった子どもがエピソードを語ったり、聴衆となった子ども達からの質問に応じる（写真１参照）。典型的には、次のようなやりとりがみられた

語り手「僕の名前は佐藤Ｋ太(仮名)です。この写真はパパとカブトムシを取りに行った写真です。僕が一番みてほしいのは、（自分でタブレットをスワイプして画僧を拡大しながら）このクワガタです。なぜかというと、それは、かっこよかったからです。何か質問はありますか？」

（全員、挙手したなかから、語り手の子が指名する。）

男児Ａ「なんで、この写真がいいんですか？」

Ｋ太「それはかっこよかったからです」

女児Ｂ「お母さんは行かなかったんですか？」

Ｋ太「行ってません」

女児Ｃ「何匹とったんですか？」

Ｋ太「１０匹です」

担任「Ｋ太くん、発表上手でした。次は、感想を発表しましょう」

女児Ｂ「Ｋ太くんと一緒にとりにいきたかったです」

女児Ｃ「Ｋ太くんの発表する声が大きかったです」

担任「そうだね、大きかったね（語り手の頭をなでる）」

男児Ｄ「僕が取りに行ったとき、Ｋ太くんより一匹多い数だけ捕まえた」　（以下、略）

● 考察とまとめ

前節では、つるみね保育園の「プレゼンタイム」について、幼児教育と子育て支援の二つの観点にわけ、デジタルストーリーテリングの観点から、その実態をとらえてきた。最後に、その意義について検討する。

Cazden（2000）は、「Sharing time」のなかで、白人ではない子どもや母語が異なる子どもに対し、教師が質問することを通じて「白人文化に適合する話し方」へと枠づけする傾向

があることを指摘し、そのような語り方に親しんでいない子ども達にとっては、自らのエスニシティーに基づく自己表現が阻害される可能性があることを懸念した。

本稿のデータからは、保育者ではなく、子ども達が質問する場面が多いため、保育者主導で「語り方」の型に統制するリスクは軽減されていることが分かる。子ども同士の仲間関係のなかで、画像を補助的に用いながら、言葉によるやりとりが成立するプロセスが見出された。このことは、語り手となった子ども自身が、主体的に、クラスメートを聴き手として意識しながら、相手との対話が成立する「語り方」を試行錯誤し、身に着けていく可能性が高まるという効果が示唆される。

また、子育て支援の観点からは、園でのクラス活動と家庭における親子のやりとりとの好循環が促され、園と家庭との連携が深まる可能性があることが指摘できる。これまでは、家庭での出来事が、保護者から担任への報告だけで終わってしまうことが多く、クラス活動とは分断されていることが多かった。「プレゼンタイム」の活動自体が、家庭における活動と園におけるクラス活動との連携なくては成立することができない性質をもっており、保護者が撮影したデジタル写真と子どもの語りを媒介として、園と家庭の双方の活動はお互いに高め合う関係にある。子どもの育ちを中心とする、デジタルな子育て・子育ち支援の在り方を模索する上で、「プレゼンタイム」は、一つの範例となると言えよう。

● 引用文献

Cazden, C. B., 2001, ***Classroom Discourse: The Language of Teaching and Learning***, 2nd ed, Heinemann.

保育の友編集部, 2018,「特集：ICT を活用した業務軽減により保育の質を高める」『保育の友』66(12):8-23.

Michaels, S., 1981, "Sharing Time: Children's Narrative Styles and Differential Access to Literacy," ***Language and Society***, 10: 423-442.

文部科学省, 2011, 『言語活動の充実に関する指導事例集：思考力，判断力，表現力の育成に向けて【小学校版】』教育出版株式会社.

西岡裕美, 2014,『教育に生かすデジタルストーリーテリング』東京図書出版.

小川明子, 2016,『デジタル・ストーリーテリング—声なき想いに物語を』リベルタ出版.

高橋翠・淀川裕美・野澤祥子・関智弘・村上祐介・遠藤利彦・秋田喜代美, 2017,「保育・幼児教育施設における保護者との情報共有と利用ツール：ICT ツールの利用状況」『電子情報通信学会技術研究報告：信学技報』116(524): 119-124.

渡邉景子・杉本正和・角田雅仁, 2017,「幼児・初等教育における ICT を活用したキャリア教育の成果と課題」『情報教育シンポジウム』225-230.

［今後の見通し］

本稿は、あくまでも事例研究であるため、得られた知見の信頼性を高めるためには、他園での実践事例も視野にいれる必要がある。デジタル・ストーリーテリングと名乗ってはいないものの、類似の取り組みの保育実践を行っている園（S 大付属こども園など）でも、その実践プロセスと効果について、データを蓄積し、検証を重ねていきたい。